

聴覚障害者に対する統合的アプローチ

－ろう重複障害者生活労働施設での取り組み－

並木(福田) 桂 横山 公美子 西沢 啓子
(大正大学カウンセリング研究所) (大正大学大学院)

山口 愼一 村瀬 嘉代子
(ろう重複障害者生活労働施設・所長) (大正大学人間学部)

<要旨>

当研究所では平成11年より、ろう重複障害者生活労働施設の入所者に対する心理的援助を施設との連携のもと行っている。ろう重複ということ、聴覚が損なわれていることに加え、知的障害や視覚障害、肢体障害、精神障害等を抱えており、これらの人々の抱える心理的問題には、すぐれて個別的にして多様なアプローチが必要であることを強く実感してきた。この臨床実践の一端から、ろう重複障害者に対する心理的援助にとって求められる要件を以下の通り考察した。

①柔軟性をもって個別化したコミュニケーション・チャンネルを探す。②「表現すれば呼応する対象がある」「人は交流できる存在である」という手応えをいかに提供できるか。③着手できることから生活経験を広げ、より健康で豊かな生活を目指す。④「柔らかな受容」と「確かな現実原則」という一見矛盾した課題をいかにバランス良く、相手に即応して適用していけるか。⑤聞こえないということ、コミュニケーションが阻害され内面の歴史が寸断されている場合が多いが、それを意味ある個人史として本人の中でどう繋ぐか(育ち直りという視点、先の見通しを持つこと)。⑥施設との連携(日常を共にする援助員と共に、本人の個人史を辿りながら問題行動の背景にあるその人なりの必然性を理解すること、カウンセリングだけが浮き上がってしまわないよう、日常生活に還元できる関わりを常に考えること)

<キーワード>

聴覚障害、ろう重複、コミュニケーション・チャンネル、連携、統合的アプローチ

【はじめに】

今日、心理臨床の対象領域やアプローチの方法は多様化してきているが、聴覚障害者に対する心理的援助の実践や研究報告は、その緒に付いたばかりであり、国内では古賀・藤田・小林(1994)、河崎(1996, 2000)らの研究が主なものとして挙げられる。

ろう重複障害者を理解する為の視点として、①聴覚の障害とはコミュニケーションの障害であること、②健聴者の言語感覚並びに構文構造と聴覚障害者のそれは異なること、③障害の程度、発現はさまざまであり、それらは生育環境、時代(口話法の強調から、手話、指文字の表現をも次第に認めるろう教育の時代的変遷)とも輻輳していること、④手話は伝統

的手話と文法的手話、さらに独自の身振りなどさまざまであること、⑤適切な教育、養育経験の欠如などが挙げられ(村瀬, 2001)、これらに対する理解は不可欠であると思われる。

本稿では上記のことを踏まえ、ろう重複障害者生活労働施設における、心理的援助の実践の中から一事例を取りあげ、検討・考察することとする。

【施設の概要】

入所対象：重度の聴覚障害を持ち、その他の重複する障害などのために就労や社会生活に困難を持つ人々。

入所者数：現在 50 余名。

【事例の概要】

クライアント：Mさん、初回時 31 歳、女性。
主訴：強迫症状があり食事や入浴に 1 日の大半を費やすこと、他者とのコミュニケーションがほとんど取れないことについて、本人のカウンセリング及び施設での対応についてのコンサルテーションを求められた。

家族：現在、父、母、弟の 4 人家族。両親とも中国残留孤児。

生育歴：

0歳	黒竜江近くの農村で生まれ育つ。
6歳	6歳まで健康であったが、次第に聞こえが悪くなり、発語も消失する。文化大革命のさなか日本人ということで、家族は苦勞の連続。充分な治療も受けられなかった。
13歳 ～17歳	家族と共に日本へ帰住。 14歳時養護学校に入学するが、重い障害を抱えた級友に驚き、食事をとれなくなり1年経たない内に辞める。15歳でろう学校小学部に入学し、日本語（手話・キョード・読み書き）を学習。翌年6年生に飛び級。 17歳時、ろう学校中学部（重複クラス）入学と同時に、寮での生活を開始。手洗い強迫が始まる。また、この年左耳の手術を受けるが、予後不良（この時両親とも日本語での会話が難しく、不本意な手術であった）。次第に内閉的、強迫的になる。
18歳 ～27歳	ろう学校高等部を経て22歳時より通所施設。25歳時よりうがい強迫が始まる。27歳時、強迫傾向強く拒食状態が続き、精神科10ヶ月入院。退院後、状態は元に戻ってしまう。
28歳	現施設に入所。 当初は、作業への参加も可能であったが、来談時は「ゆったり班（障害の状態が重く、作業への参加が困難な入所者を対象にしたグループ）」に移動。しかし、ゆったり班での取り組みへの参加は難しい状態であった。
31歳	大正大学カウパシ研究所へ来談。

【面接の経過】

*文中、Th 1…村瀬、Th 2…並木(福田)とする。

第1期：平成X年6月（#1～#3）

初回、本人、母親、施設職員(担当援助員、看護婦)で来所。Mさん、髪をお下げに結び、ピンクの帽子とズボン。小柄でぼっちゃりとしている。

本人は、母親、職員と Th 1 が話している間、目を堅く閉じたまま、テーブルの下で手を動かしている。母親は「また、やっている。家でも、こうやっている」と手の動きを真似る。「本人、片耳少し聞こえる。普段家でのやりとりは、手話を少しと 50 音(指文字)で」

援助員から、猫や小鳥などの小動物や赤ちゃんが好きであること、色はピンクを好み、身の周りのものはピンクが多いこと、本来手

先は器用で裁縫が得意であること、援助員の間では薬に頼りたくないという意見が多く、服薬はしていないことなどを伺う。まずはMさんの担当者を決め、月に数回の施設への出張も検討することに。

翌週(#2)、本人、母親、担当援助員の3名で来所。この日は、過去の手術の失敗もあり容易に援助を受けるには戸惑いのある母親に会い、理解を求めるのが目的であった。母親はここでやっと安堵し、「お願いします」と言いつつ、「あの子より私の方こそ苦労したが…」と心情を吐露する。

この日 Th 1 が自宅で飼っている猫を伴っており、Mさんは破顔一笑、母親に向かって「モー！」と喉の奥から声を出し、抱き上げ頬ずりをする。母親「『モー』とは、中国語で猫のことです」と。

3回目の来所(本人、看護婦)の際、Th 2 がMさん担当として初めて会う。Mさん、固く老けた印象。目を堅く閉じたまま、唇をぎゅっと噛みしめ、まるで何かを紡ぎ、機を織るような手の動きに没頭している。

昼食を共にするが、カレーライスとサラダを学生食堂で自ら選ぶ。食事を前に手の動きが儀式のように始まるが、Th 1 が猫がカレーを今まさに食べんとする絵を描き、Mさんの傍らに置きそっと肩に触れると、閉じていた目をうつすらと開け、「モー」と声を出しながら「猫」と手話で表し、おもむろに食べ始める。時々目を閉じ手の動きが入るものの、50分で食べ終わる。施設での食事に要する時間に比べるとかなりのスピードだと、付添いの看護婦が驚く。

3回の面接を通しての見立て：

目を堅く閉じ、俯いて何かを紡ぐような手の動きを繰り返す様子から、他者とのコミュニケーションを拒否、緘黙状態のようでもある。幼少時の体験と現在のことが入り交じり、時系列が混乱、さらに日本語と中国語、対象とことばとの対応も混沌としているように見受けられる。また、小動物や赤ちゃん、色はピンクを好み、髪型も少女のようであることから、

年齢に比して幼くアンバランスな印象を受ける。生育歴からも、十分な生活体験、教育経験が乏しいことがうかがえる。

まずは日々の生活を楽しむ時間を作ること、そして子ども時代をもう一度生き直すような体験を重ねると同時に、施設が自分の居場所だと思えるようになること、先の見通しが本人なりに持つ時間の管理が出来るようになることが必要ではないかと思われた。

面接の枠組み：

3回の面接後、面接の枠組みを以下の通りとした。

①月に1回、Mさんと担当援助員が当研究所に来所。Th 1が援助員、Th 2がMさんとの面接を行う。

②月に2～3回(X+2年4月より毎週)、Th 2が施設に出張。

(X+1年5月より小集団での描画療法などを中心とした関わりを、X+1年7月よりMさん他、数名の個人面接を開始)

③月に1回(X+1年10月～)、Th 1が施設に出張し家族や職員に対する心理的援助を行う。

第2期：X年7月～12月(＃4～＃17)

大学来所時(＃5)に、Th 1の猫と2度目の対面。「モー！」と声をあげ、抱き上げる。唾をティッシュに拭い取る行為を繰り返していたMさんの表情がパアッと輝き、目に力が宿る。

しかし施設でのMさんは、いつも食堂でポツンと一人、朝食のトレイを前に手で何かを紡ぐような仕草を繰り返したり、唾を取る行為に没頭している。その際、目は堅く瞑り、うんうんと頷くように首を振り、ギリギリと激しい歯ぎしりがある。テーブルの側に行き、肩に触れ「こんにちは」と手話で挨拶すると、ちらっとこちらを見るが返事はなく、またすぐに目を瞑り手の動きが始まる。当初、Th 2は訪問中のほとんどの時間を食堂の片隅のMさんの傍らで過ごしていた。Th 2が側にいることは拒否はせず、描いた絵や文字をトレイの隅にのせておくと、ふと目を開けた瞬

間にそれを指さし、目を合わせ微笑む。

Th 2は手話がまだ出来ないこと、Mさんは自分の名前は漢字で書け、ひらがなでの筆談は可能であることから、まずはやりとりをするための手帳(カレンダー付)をこちらで用意するが、日常の中に根付くことはなく、9月以降はしまい込まれてしまう。

また、手先が器用であり、日常の中での楽しみや作業に繋がる可能性があることから、大学来所時に手芸を提案。本人も興味を示したため、施設訪問時にも試みる。ハンカチやアクセサリ作りを行ったが、食事に取りかかれぬ状態でも目の前に材料があると、それらの中から自分の好きなものを指さしTh 2を見て笑い、その後食が進んで次の行動へ移ることが出来る。ピーズをTh 2と一緒にやった後、ゆったり班の作業にも参加したとの報告が担当援助員よりある。一緒にブレスレットを作った際(＃8)、作品を援助員や他の入所者に見せ、腕を差し出してアピール。しかし＃14以降、手芸の材料が目の前に用意されていても食事に取りかかれず、手の動きや唾取りに終始してしまう状態が続いたため、Th 2の飼っているハムスターを伴うことに。えさをあげてもらおうと、Mさん自身も食が進む。通りかかった援助員に何かと聞かれ指文字で「ねずみ」と答える。「ハムスターだよ」と教えられ、「ハ・ス・ム・タ・ー」と繰り返した後、Th 2にもその指文字を教えてくれる。

回を重ねる中で、Th 2が絵や文字を書いているときには顔を寄せ、絵や文字を追うようになる。11月(＃15)、それまでMさんから「かく(描く・書く)」ことは、ほとんどなかったのだが、自分のカレンダーの水曜日に「とうきょう行く。ふくだ、むらせ」「次、12月〇日、とうきょう。ふくだ、むらせ」などの書き込みが見られるようになる。「ここでの動きもキビキビとしていて、施設にいるときは違う感じがします」と、援助員。

この時期表情は明るくなったものの、Mさんの日常は、相変わらず食事に時間の殆どが

費やされ、生活リズムもずれ込んでいた。

第3期：X+1年1月～3月 (# 18～# 23)

当初、目の前にあるものは全て食べねばと、悲壮感さえ漂うような食べ方だったのが、この頃には大学での昼食の際、お腹一杯だったり苦手なものだと残すようになる。

また第2期まで、こちらがMさんの興味や関心に添ったいくつかの選択肢を用意しておき(手芸中心、昼食も予めこちらで準備)、その中からMさんに自分の好きなものを選んでもらっていたが、第3期には Th 2 と近くの商店街へ昼食を買いに行く試みを開始する。

〈お昼ご飯、買います。福田と、一緒に行きましょう〉とおぼつかない手話で伝え、お金を見せると、「ごはん」と指文字で返してくる。いそいそと自分のリュックと手提げを持ち、先に立つ。道中、車が脇を通ったり踏切を渡る際は、自然に手を繋いでくる。商店街にあるパン屋さんを指さし、Th 2 を引っ張る。最初は、手当たり次第自分が食べたいものを購入していたが、回を追うごとに「あの人には、これ」と考えながら買うようになる様子が見受けられ、帰ってきて配るときには生き生きと采配を振るう。

施設での表情はぐっと柔らかくなり、ゆったり班での取り組みにも少しずつ参加し始めた。援助員も、「お話しノート」を用意し、時計の絵など用いながら本人が先の見通しを持てるような関わりをしている。

Mさん、Th 1 の猫にそっくりのぬいぐるみをベッドの脇に置いてあり、施設訪問時に見せてくれる。部屋の壁には、大学で Th 1 が描いた猫とひよこの絵が飾っており、その隣には自分で描いた鳥の絵。

3月、担当援助員を始め職員の方が数名辞めることに対して、ノートに「3月17日金ようび、Mさんはおわかれかい。4月12日水ようびMさんとうきょう」「□□(施設の名称)やめる。かわりとうきょうたいしょうだい」、などとカレンダーやお話しノートに書いてある。施設長によると、今まで辞めた職員の名前は全部覚えているとのこと。

第4期：X+1年4月～8月 (# 24～# 31)

担当援助員がT氏に替わる。Mさん、すぐに自分の担当として受け入れ頼りにしている。

研究所来所時(# 25) 買い物に行く際、すたすたと先を歩き、大学の門の前で Th 2 を待ち、いつもと違う方向を指さす。Mさんの方から手を繋いで来て、角に来ると周りを見渡し行きたい方向を指さす。本屋さんに入り動物の赤ちゃんの写真集を見つけ、Th 2 を呼び声を出して笑ったり、文房具屋の店先に飾ってあるキティちゃんのホワイトボードを見つけ、購入したり(後に、自室の壁に掛け、スケジュール表として使用)。

帰り道で、パンを4人分買う。帰ってから食べる準備を一緒にするところまではスムーズだったが、なかなか食べ始めることが出来ない。いつもと違う様子にT氏と首を傾げていると、「むらせ、まだ」と指文字で表し、待っていることが分かる(事前に Th 1 が遅れることは伝えてあった)。Th 1 が出張から戻ってくると、パアッと表情が明るくなり、途端に食べ始める。

25以降 Th 2 と買い物に出かけると、手を繋いで色々なお店を周り、興味のあるもの、好きなものを指さして教えてくれ、その後指文字で繰り返すということが続く。

30では、援助員が前日に大学で何をしたいか確認したことで、Mさんの行動がスムーズで目的的に買い物が出来た。目的を持ち限られた時間の中で行動するというのも、今のMさんならば可能かもしれないと考え、援助員と相談し、次回以降買い物をすれば、他の人に何が好きか何を食べたいのかを確認した上での買い物を試みることに。

31では、昼食をなかなか終わらせることが出来ないMさんに、援助員が「1時、終わり。Tと鳥、見に行きます(いつも大学からの帰りにT氏とペットショップに立ち寄っていた)」と終了である旨を伝えると、ものすごい勢いで自分の太股をパシンと叩き、も

どかしげな表情を見せる。

日常生活では、お話ノートが活用され根付き始める。援助員やボランティアなど、Mさんと関わる人々も積極的に、絵や文字でコミュニケーションをはかり、Mさん自身も常にノートを携帯。自分でも日付を記入し、「□□(施設の名称)やめる」ということや、辞めた職員の名前を連ねることが多かったが、# 28以降、大正大学の隣の新築マンションの絵(長方形を16に区切っている)を描くことが繰り返される。各階に「Mさん、おかあさん」「T(担当援助員)」「Y(施設長)」「ふくだ」「むらせ」などと記入されている。マンションは、来所の度に援助員と見に行っているとのこと。

また一方で、お話しノートの中での表現が拡がりを見せる。「あさ6じはん おきる かみのけ 7じごはんたべました 8じはんくるまでんしゃ 東京バスにのりました。とうきょうふくだ むらせ Y T Mさん とうきょう いえ きれい あたらしい つくりました。あした6月29日木ようび はれ あさ6じはん おきるかみのけとかす 7じはん ごはんたべます。8じあかちゃん(援助員の一人に最近赤ちゃんが生まれたとのこと) あかちゃんあるく」

第5期：X+1年9月～X+2年3月 (# 32～# 46)

31で、「ふくだ、ねこ、つくる」と要求を出し一緒に作ったのだが、大学では完成させることが出来ず、作りかけのフェルトのマスコットを持ち帰っていた。# 32、<何、したい?>と尋ねると、「ねこ、つくる」と手話で返事が返ってくる。Mさんの方から「上(2階)、一緒、行く」と誘ってくる。Mさんは相談室に行こうとする Th 2を引っ張り、自室へ。2人で猫のマスコット作り。<Mさんの猫、女。私の猫、男>と伝えると、Mさんも同様に手話で繰り返し、笑う。Mさんの方は、普段少しずつ手を加えていたようで、あとは鼻と口許だけ仕上げれば完成といった状況。ピンクの刺繍糸で一気に仕上げ、完成

品を渡してくれる。ここまで仕上げるのどれほどの気持ちと時間がかかったのだろうとためらわれたが、Mさんは Th 2の掌にそれをそっと置き、Th 2の作った蝶ネクタイの猫を代わりに受け取る。

35の大学来所時、Mさんは髪を短く切っており、年齢相応のしっとりとした印象に。表情もにこやかで、自分から Th 2に話しかけ、時に声も出る。食事もそれまでは他の人のものでも手を出していたのだが、自分の分だけを食べる(第6期には、自分の分を分けてくれるようになる)。早く食べ終えようとの努力の様子が見られる。またこの回、手提げ袋の中から駅で配っていたというシャンプーとリンスの試用品(ピンクの袋入り)を出し、Th 1と Th 2に渡す。お礼を言い、でもこれは自分で使って…と返そうとするが、Mさんは「いいから、あげる」とジェスチャー。また、Th 1の施設訪問時には、Th 1の姿を見て印刷室からピンクのコピー用紙の束を持ってきて差し出したとのこと。

この頃、援助員がゆったり班の予定をノートに書いて伝えると、その先の予定を知りたがり、以前購入したホワイトボードに予定を書いて欲しいと頼んできたとのこと。

Th 2の施設訪問時には、フラワーアレンジメント(# 34, # 38)やコラージュ(# 37, # 39)、布製の小さなお雛様の額装(# 45)など、季節感があり、短い時間で仕上がり、生活の中に残せることを意識して取り入れ、関わっていた。Mさんは作品が出来ると、Th 2と目を見合わせて満足そうに笑い、施設長や事務員、厨房の栄養士、調理員、通りかかる援助員に見せに行く。それぞれに感想を伝えてもらおうと、満足し自室に持ち帰る。

37、それまでも何回かコラージュを試みたものの関心を示さないでいたが、他の入所者がやっているのを目の当たりにして、自分も雑誌をめくり始める。切ることには抵抗があるのか、好きな箇所だけ指さして Th 2に教えてくれる。試しに、Mさんが指さした箇所を切り取ると、嬉しそうに受け取る。

以後、Mさんが指さし、Th 2が切ることを繰り返す。画用紙に貼るのは嫌がり、切り抜きを画用紙に載せて部屋に持ち帰る。# 37では初めてコラージュ作品を作るが、ピンクの画用紙の中央に今まさに走りださんといった印象のピンクの乗用車が貼られ、周囲に食べ物(トンカツ、柿、みかん、小麦粉など)やキッチン、トイレ、シャンプードレッサーの切り抜きが配される。

39、他の入所者の面接時間にも姿を見せ、にこにこ少し離れた場所に座り、自分の手提げ袋を置いて雑誌や広告をめくる。<ごめんなさい。Mさんの時間、4時から。今は〇〇さんの時間>と繰り返し伝え、やっと腰を上げる。(# 29からは他の入所者への個別カウンセリングが始まり、Th 2はMさんの他、数名と関わるようになっていた。Mさんは、Th 2の姿を見ると他の仲間との面接中でも相談室に入って来るが、Mさんに伝わるようにどう説明すれば良いのか試行錯誤している最中であった)

40の大学来所時、面接終了時間になり、<ごはんお終い。時間です。後は持って帰って下さい>と伝え、目をむいてTh 2を睨み頑として動かず。しかしこちらも譲らないでいると、Mさんはあきらめて手渡した袋に残りを入れ、席を立つ。

41からは、施設での面接をMさんに事前に伝えてある予定時間の中で行うこととする(それまでは、Mさんの状態に即して柔軟な対応をしていた)。食事に時間がかかっても、面接予定時間が過ぎた場合は出入り自由のグループの時間まで待ってもらうこととした(この頃、個別面接又は集団療法が終わった後に、自然に数名の入所者が集まるようになっていた)。

Mさんは度々他の入所者の面接時間にも顔を出し、去り難そうにしていたが、簡単な手話や指文字、ジェスチャー、筆談、手作りの時計盤を用いての説明を繰り返す中で、しぶしぶではあるが少しずつ納得するようになり、その出入り自由のグループで、ゆったり、

のんびり過ごすことを楽しむようになる(# 42, # 43, # 44, # 46)。

さらに、この時期(X+2年2月～)、お話しノートを紹介してのやりとりが減り、指文字と手話での直接的な会話が多く見られるようになる。

X+2年3月には、施設で職員全員が参加するカンファレンスが行われ、Mさんについてもそれぞれの立場からの報告がなされた。Mさんはこの月、ゆったり班の作業に初めて全日程参加しており、援助員からは「宿直室に来てお菓子やコーヒーをくれる。Mさんの方から、人と関わろうとする部分が生じてきた」「自分から先の見通しを知りたがるようになってきた」「援助員のMさんに対する見方が変わると、Mさんの変化が生じてきたように思う」「お話しノートが必要なくなりつつある」などの声が聞かれた。

第6期：X+2年4月～現在 (# 47～)

4月(# 47)大学来所時、帰り際にTh 2が次の約束をカレンダーを見ながら示そうとすると、自分から1ヶ月後の水曜日を指す。これまでは、同様の場面では必ず翌週の水曜日を指しており、またお話しノートにも、約束した日以外の水曜日も全部大学に行く日として書き込んでいたので、援助員もTh 2も驚く。

また、担当援助員のT氏が、Mさんの実家のある市が統合され名称が変わったこと、援助員の中の一人を辞めるのではないかとMさんが思っているらしいこと、T氏自身が結婚し名字が変わったことなどを話題に取り上げ、お話しノートに「〇〇市・△△市・□□市→☆☆市」「〇〇さん→□□(施設の名称)やめません。□□います」「T氏の旧姓→新姓」など、分かりやすく示していた。5月に来所した際(# 49)、Mさんはこの箇所をTh 2に見せ、書いてあることをまるで自分に言い聞かせるように指文字で繰り返した。

6月(# 51)大学来所時、担当援助員から金銭について、あるだけ使ってしまうので困る、金銭管理が今後の課題であるとの相談を

受ける。この日、MさんはボディタオルをTh 2と一緒に買いに行くつもりであり、久しぶりに買い物に出たのだが、ボディタオルと昼食を買った後、スーパーの店頭にあった5個組のティッシュを買おうとする。Th 2が「お金、大丈夫?」と聞くと、「大丈夫」と答え、レジへ。先程のボディタオルと帰りの交通費を考えると余裕はないはずで、どうするのかと思って側にいると、昼食代のお釣りがら出そうとした為、<これは、お昼ごはんのお金。大学のお金です。Mさんのお金、違う!>と伝える。Mさん、自分の財布からお金を出そうとするが、残りはあまり無い様子。<電車、帰る、お金、大丈夫ですか?>と問うが、そのままお金を払おうとする。Th 2も迷ったものの、Mさんに帰りの交通費が必要で、今日は1個だけしか買えないことを告げ、レジの人にも事情を説明して、残りの2つを返す。Mさん、ティッシュの持ち手からなかなか手を離そうとはしなかったが、こちらの目を見て「しょうがない」という感じで諦める。大学に戻ってからも、Th 2の方を時々うらめしそうに見やる。事情を知ったTh 1が、5個組のティッシュを両手に持った猫の絵を描き始めると傍らで覗き込み、猫を指した後自分を指し大きな声を出して楽しげに笑う。猫の傍らに描かれたヒヨコを指し「ふくだ」と指文字で表した後Th 2を指し、また笑う。これで気持ちの建て直しが出来たようで、食事を切り上げ次の約束をして帰途につく。

現在、強迫行為は減ったとはいえまだ残っており、歯磨きや入浴がなかなか出来ず、出来ても数時間を要するのだが、自分で先の見通しを持ちつつ生活しており、作業も時々休みながらではあるが自分のペースで参加できている為、個別面接の回数も徐々に減らしていくことになっている。

【考察】

①柔軟性をもって個別化したコミュニケーション・チャンネルを探す

Mさんは聴覚障害に加えて極度の内閉状態にあることから、コミュニケーション手段に乏しく、疎外感・孤立感の中にあるであろうこと、また生育歴からも、断ち切られるような歴史の中、今日に至っていることが伺える。一日がほとんど食事のためだけに費やされるということや、赤ちゃんや猫や小鳥などの小動物などには反応を示すことから、Mさん自身、葛藤の少なかつた幼い日に戻りたいという気持ちがあるのではないかと推察された。

まずは、何よりも安心感を贈ること、自分をよしとされる体験を改めて重ねること、症状の除去に腐心するよりも日常の中に楽しみを見出すことを目指し、その為に少人数で暖かく受容的な雰囲気の中食事を共にすること、そして生きた動物の手触り、暖かみ、息づかいに触れることから着手した。猫の登場には、母子ともに緊張緩め、笑い声をあげ、Mさんからは中国語の発語さえ聞かれる。さらに、Th 1が描いた絵が、Mさんの食行動を促す手がかりとなる。山上(1990)は、行動療法の立場から「その人がその人としてあるのは、じっとしていることでも、目を閉じていることでも、息をのむことでも、そこに沢山ある実際でも想像でも、個体内でも個体外でも、刺激に反応するその活動である」と述べているが、本人の微かではあっても確かな反応をどう見出し、コミュニケーション・チャンネルをどこに求めるかということが、行動変容に影響を及ぼし、さらに治療関係を結び、面接を進展させる鍵となることが分かる。

②「表現すれば呼応する対象があるということ」「人は交流できる存在である」という手応えをいかに提供できるか

Th 2は当初、手話や指文字は全くといって良いほど出来ず、一体これでどうコミュニケーションを取ればよいのか、共通の「ことば」を持たないままセラピストとして一体何が出来るのか…、と無力感に苛まれつつ試行錯誤を続けていた。第2期では、Mさんから表現されるもの(表情、仕草、発声、手話、指文字など)全てに注意を払い、見守り、Th 2に出来

る精一杯の表現様式(視線、身振り、片言の手話)で返し、次のMさんからの表現を待つことが繰り返された。これは、Stern,D.N.(1985)の言うところの情動調律と繋がるのではないかと思われ、河崎(2000)も「互いに響き合う体験」として取りあげている。母親が赤ちゃんの様々な仕草や発声に呼吸を合わせ、表現様式は異なっても何らかの反応を返していくことは、「表現すれば呼応する対象があるということ」を伝え、周りの世界に対する信頼感を生じさせる。このことは「人は交流できる存在である」という手応えを相手に贈ることに通ずるであろう。

③着手できることから生活経験を広げ、より健康で豊かな生活を目指す

第3期では買い物を試みるが、買い物の際のMさんの様子は、まるで探索期の子どものように、外の世界を確かめ、道端の花や建物や、庭先に繋がれている犬、通りすがりのベビーカーの中の赤ちゃんなどに目を留め、指をさし、Th 2と視線を合わせ笑う。車が脇を通り過ぎると慌てて手を握ってくるが、またすぐに手を離してTh 2の少し先を歩くといったことが繰り返された。これは、この時期の買い物がMさんにとって退行的な要素を多分に含んでいたことを示している。

さらに買い物の内容について、最初は自分の好きなものだけを手当たり次第選んでいたが、徐々に「誰に、何を」とイメージしながら買う様子が見受けられるようになった。これは、第1期、第2期を通して、Mさんの為の時間と場所と人とが用意され、その中で暖かく見守られ、Mさんから為されるあらゆる表現が待たれ、支持されることを通して、第3期において他者の存在が改めてMさんの中に根付き始めたことを表しているのではないかと思われる。このことに呼応して、こちらの関わりを調整、各自の希望を確認してから買い物に出かけるようにし、Mさんもそれを自然に受け入れた。他者の希望を聞くことは他者の心性への気付き、そして社会性に繋がっていくであろう。このことから、Mさんに

とっての買い物は、退行的でありつつ成長促進的に機能したと言えるのではないだろうか。

一方、食事の場面において、食事に取りかかるまでに相当の時間を要する→目の前にあるもの全てを無理してでも食べる→他の人の分まで食べようとする→面接時間で食べきれないものはお土産に持って帰る→残せるようになる→自分の分を他者にあげる、という変化が見られた。これは、自分が表現することが大切に扱われる中で、「他ならない自分」を意識できるようになり、Mさんの中にゆとりが生じ、自他の区別や利他的な行動が見られるようになったのだと思われる。

④「柔らかな受容」と「確かな現実原則」という一見矛盾した課題をいかにバランス良く、相手に即応して適用していけるか

上述したように第1期から第3期において、Mさんから為されるあらゆる表現が待たれ、支持された。この時期には、こちらが用意したMさんの興味に添った選択肢の中から、やりたいことを選んでもらうという関わりが多かったが、第4期以降、Mさんからははっきりとした要求が出始め、それに向かって行動を移そうという気持ちも見られるようになった。# 31では、面接終了時間について援助員と対峙した際、自分の太股を思い切り叩き、自身の強迫行為に対しての苛立ちやもどかしさを表すが、援助員T氏の毅然とした揺るぎない態度に対して「応えなければ」という気持ちと同時に、思うようにならない自分に対するもどかしさで葛藤しているようで、Mさんの大きな転機のように感じた。このように来所時、限られた時間の中での食事が可能になりつつあり、自律性の芽生えが感じられたことからX+1年5月の施設でのカンファレンスにおいて、少しずつ食事時間に制限を設けてもよいのではないかということを取り上げ、施設での実践が始められた。

こうして第5期では、それまでゆるやかだった施設での面接の形態を構造化し、約束した時間以外に来て対応出来ないことを繰り返

返し伝えた。最初は戸惑っていたMさんも、次第に了解するようになり、約束した時間に合わせて行動を移すことが出来るようになりつつある。

障害者や子どもに対して、本人の意思決定能力を測りかねる場合に「パターナリズム」（法学における概念で「保護的配慮」「父権的干渉（保護・温情）」と訳される）のもとでの対応がなされることが多い。家族やそれを取り巻く専門家が、本人に対する支援のあり方を吟味・決定しようとする時、当事者の意思決定及び意思表示が困難である場合は往々にしてあろう。

いかにして本人の自律性を保障するか。この事例では、まずはMさんにとって安心して自分を委ねられる環境を提供する中で安心感・信頼感が生まれ、Mさんにとって意味のある活動（買い物など）を通して、Mさん自身が自律性を発揮できるようになった。

保護と自律のあいだ（森田，1999）で、いかに相手に即応しつつそのバランスを取るのかを考えることは、ろう重複障害者への心理的援助を考えるにあたっては避けて通れない問題であろう。

⑤聞こえないということでコミュニケーションが阻害され内面の歴史が寸断されている場合が多いが、それを意味ある個人史として本人の中でどう繋ぐか

・子ども時代を生き直す、育ち直りという視点

当初、Mさんにとって、今まで体験してきたこと、自分の中の歴史は断片的なものようであった。そして「環境の変化」は必ずしも良いものではなく、むしろ予測不可能な恐ろしいことであり、次に進むよりは同じ行為や状態を繰り返すことで安心を得ていたのではないかと思われる。

年齢に比して幼くアンバランスな印象を受けること、生育歴からも十分な教育経験、生活体験が乏しいことが伺えたことから、まずは日々の生活を楽しむ時間を作ること、そして子ども時代をもう一度生き直すような体験を重ねることが必要だと思われ、第1期から

第3期までの関わりの中で、これに取り組んできた。

第4期以降は、「お話しノート」が日常生活で積極的に活用され、定着し、自ら絵や文字で予定や意思を表現するようになったが、その中で繰り返し大学隣の新築マンションが登場した。Mさんは来所の度に、古いマンションが取り壊され新しいマンションが建つ過程を目の当たりにしてきており、自分と重ね合わせて見ていたのかもしれない。

また、マンションの絵の中に、母親、担当援助員、施設長、Th 1、Th 2の名前が繰り返し書かれており、これらの人々の存在がMさんの中に拠り所として根付いてきたことがうかがえる。

・先の見通しを持つ、変化に対する耐性

さて第1期、第2期と、Th 1及びTh 2とMさんとの関わりの中では絵（特にTh 1の飼い猫）が次の行動のきっかけとなることが多く、またコミュニケーション方法は絵と文字が中心であった。第3期において、Mさんは施設側から用意された「お話しノート」を使い始め、第4期では、施設でもノートを介し絵や文字を通してのコミュニケーションが根付いてゆく。

また第3期終わりから第4期にかけて、退職する担当援助員や他の職員に対して、自分も施設を辞めるとの訴えをノートに記していた。もちろん、一つには、気持ちを寄せる職員がいなくなる淋しさもあったろう。また一方で毎年職員は何名かずつ入れ替わっていくが、自分はこの先どうなるのか？という自分自身の将来への不安を、先の見通しが持てるようになりつつあった分、感じてしまったのではないかとも思われる。このことは、第4期に次の行動に移れない自分自身に対してのもどかさしさを表現したことと合わせて、Mさんが自分自身と対峙し、微かではあるが将来への展望を持ち始めたと言えはしまいか。

こうして第6期には、「お話しノート」に担当援助員が書いた幾つかの事柄の変更についての記述をTh 2に見せ、自分に言い聞かせるように繰り返す様子から、「変化」を受け

入れることが可能になり、「変化」に対する耐性が出来つつあるように感じられた。

⑥施設との連携

Mさんに対しての心理的援助が行われる中で、カウンセリングを受けるというだけではなく、その為に援助員の方が細やかな配慮をすることが大きな意味を持ったと思われる(例えば研究所に来所するのも往復3時間以上かかる道程を毎回担当援助員が付き添った)。Mさんは自分が他ならない存在として大切に遇される経験をし、気持ちに少しゆとりが生まれ、自分だけの閉じた世界に他者の存在が根付き始め、行動がより社会化されたものになってきたのではないかと思われる。

また、担当援助員や施設長と適宜連絡を取りつつ、共通の目標のもと、それぞれの立場からの援助を行ってきた。

こうした中で、a)日常を共にする援助員と共に、本人の個人史を辿りながら問題行動の背景にあるその人なりの必然性を理解すること、b)カウンセリングだけが浮き上がってしまわないよう日常生活に還元できる関わりを常に考えること、の必要性を強く実感してきた。

【全体的考察】

ろう重複障害者への心理的援助を考える際、ろう重複障害ということでのコミュニケーションの疎外に加え、人間関係での分離欠損体験を持ち、トラウマ(広く捉えるとPTSD)を抱えていることが多いことが、入所者の心理的援助を行う中で明らかになった。暦年齢としては大人であっても、日々の営みの一つ一つが真に自分の生として蓄積し、意味を持って自分という歴史が出来るに至っておらず、いわゆる言葉(この場合、手話)のみを介した心理的援助では不十分であり、「育ち直り(村瀬, 1996)」という視点が必要になる。

個別かつ多面的に、個人がその時点で何を必要としていることに応えるべく努め、施設との連携を取りつつ、今後も着手出来るところから取り組んでいきたい。

【おわりに】

Mさんを始めとする施設入所者に対する心理的援助は未だ試行錯誤の連続であるが、入所者と日常を共にする援助員のきめ細やかな配慮に助けられながら現在に至っている。

今回のMさんとの関わりについても、現担当援助員の尾上(田中)悦津子氏、施設長の山口慎一氏の日々の実践に負うところが多く、深謝したい。

【文献】

- 河崎佳子 (1996) : 聾者の心理療法と「ことば」
—聴覚障害者施設における心理相談の試み、
心理臨床学研究第14巻第1号
- 河崎佳子 (2000) : 静かな叫び—不就学ろう青年
とかかわり続けた9年間、発達81
- 古賀恵理子、藤田保、小林豊生 (1994) : 聴覚障
害者と精神医療、臨床心理学研究31 (3)
- 村瀬嘉代子 (1996) : よみがえる親と子、岩波書
店
- 村瀬嘉代子 (1999) : 聴覚障害者の心理臨床、日
本評論社
- 村瀬嘉代子、牛島定信、北西憲二、石井光、弘
中正美 (2000) : 個人史と心理療法、安田生命
社会事業団
- 森田明 (1999) : 未成年者保護法と現代社会—保
護と自律のあいだ—、有斐閣
- 成田善弘 (1987) : 強迫症、異常心理学講座Ⅱ神
経症と精神病1、みすず書房
- 小田侯朗、横尾俊 (2000) : 聴覚障害児の障害認
識に関する研究、国立特殊教育総合研究紀要
第27巻
- Stern, D.N (1995) : The interpersonal world of the
infant: A view from psychoanalysis and
development. Basic books, Inc. 小此木啓吾 (監訳)
(1989, 1991) : 乳幼児の対人世界、岩崎学術
出版社
- 山上敏子 (1990) : 行動療法、岩崎学術出版社